

Cancer Education in Schools and Communities

学校や地域で 『がん』 を学ぶワケ



群馬大学情報学部 片山佳代子

あとかき



なぜ?こんなにも多く方ががんでお亡くなりになるのでしょうか?

この問いの答えがおわかりになったでしょうか?

正解は高齢者が増えたからです。

日本人は世界一長生きをします。医療技術の進歩や環境衛生的に恵まれている日本では今後、ますます高齢化が進むことが予想されていますので、がんになる人もますます増えることが推測されているのです。

がんになることはもはや他人事ではないし、いつ自分が、家族が、友人が、がんと診断されるかわかりません。

そして、がんと診断されたその日から選択の連続が待っています。どの病院に行ったらいいのか、どの治療がよいのか、誰に診てもらったらいいのか、どの薬がいいのか…。常に選択を迫られるはずで。その時に、どこから、あるいは誰から情報を得るのか、玉石混交のがん情報の中から正しい情報を選択し続けていくためにも「がん」について知ることが大切です。そして社会全体でがんという疾患を理解し、がん患者が尊厳をもって生きることができる社会づくりに子どものうちから参画してほしいと願っています。

がんを学ぶから「がんで学ぶ」ことが重要です。

たとえがんになったとしても、たとえ余命が限られているとしても、自分らしく、生き生きと活動しているがん患者さんからのメッセージは、きっと忘れてしまう詰め込み式の知識とは違って、児童生徒の心のどこかにずっと残って、いつか苦しい場面で助けてくれる力になる、そんな風に感じています。



片山 佳代子 博士（医学）

上級疫学専門家（特にがん疫学が専門）

群馬大学 学長特別補佐 情報学部 准教授

兼）神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん教育ユニット長（神奈川県がん教育協議会 座長）

兼）国立がん研究センターがん対策研究所データサイエンス研究部 外来研究員

兼）早稲田大学人間科学総合研究センター招聘研究員

参考引用：on cancer <https://gunmadaigaku-kk.inf.gunma-u.ac.jp/katayama-labo/>